秋田県埋蔵文化財基準資料３

縄文時代竪穴建物跡集成Ⅰ（早期）

２０１４.３

秋田県埋蔵文化財センター
Akita Archaeological Center

シンボルマークは、北秋田市浦田白坂（しろざか）遺跡
出土の「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ7㎝、凝灰岩。

序

秋田県埋蔵文化財センターは、昭和56年に誕生して今年で34年になります。この間、昭和50年代後半の東北縦貫道建設事業、昭和60年代前半の七曲工業団地造成事業、昭和60年代から平成にかけての秋田自動車道建設事業、平成10年代の初期に開始された日本海沿岸東北自動車道建設事業と森吉山ダム建設事業などに伴い実施した発掘調査は、遺跡数にしておよそ400か所、調査面積は198万㎡にも及びます。

発掘調査で見つかった竪穴建物跡や土坑墓などは、私たちの祖先が旧石器時代から暮らしを営み続けてきた証であり、地域の歴史をものがたる貴重な資料です。特に竪穴建物跡は、およそ１万３千年前から、地面に竪穴を掘って、中央に炉を築くという形態を維持しながら、１万年以上にわたって造られてきました。

当センターでは、これまでの調査で見つかった縄文時代の竪穴建物跡の形態と変遷などを体系的に把握し、公開することを目的に、今年度は縄文時代竪穴建物跡集成Ⅰ（早期）を刊行しました。

当センターの業務は、埋蔵文化財の調査と研究、保存活用が三本柱であり、この集成事業も埋蔵文化財研究の一環と捉えております。本書が、県内の縄文時代研究の基礎となり、郷土の歴史教育などにも活用いただければ幸いです。

平成26年３月

秋田県埋蔵文化財センター

所　長　高　橋　忠　彦

例　　言

1　本書は、秋田県内で発掘調査が実施された遺跡のうち、縄文時代早期の竪穴建物跡を集成したもので、秋田県埋蔵文化財基準資料の３冊目である。

2　遺構の呼称は、資料出典に準拠した。

3　本書中の遺構図は、掲載の縮尺に合わせて一部再トレースを行った。

4　第２図～第７図の遺構の縮尺は100分の１、遺物は４分の１に統一して掲載した。

5　本書に掲載した遺物は、資料出典に掲載されていた遺構内出土遺物の一部である。

6　本書の作成は、秋田県埋蔵文化財センター中央調査班の秋田県基準資料集成担当者が行った。
Ⅰ・Ⅱを山田が、Ⅲを加藤が執筆した。
担当：利部修　水品仁志　加藤竜　山田祐子

目　　次

序
例言・目次
Ⅰ　概　要……1
Ⅱ　事　例……1
Ⅲ　総　括……6
参考文献・資料出典……9
第１図　遺跡分布図……10
第１表　秋田県内の縄文時代早期竪穴建物跡一覧……11
第２図～第７図　縄文時代早期の竪穴建物跡と遺構内出土遺物（１）～（６）……12～17
奥　付

Ⅰ　概　要

本書は、秋田県内で発見された縄文時代早期の竪穴建物跡[註1]の集成である。

当初は秋田県教育委員会調査分のみを対象としたが、事例が少ないことから市町村教育委員会調査分も含めた県内調査事例全て、９遺跡19棟を集成した（第１図）。

本書では縄文時代早期を集成対象としているが、県内には草創期の遺構の可能性がある竪穴建物跡が報告されており、横手市岩瀬遺跡は、その唯一の事例である[註2]。

県内における縄文時代早期の遺跡の調査は、1963年から開始された湯沢市岩井堂洞窟の調査を嚆矢とする。洞窟内からは焼土遺構が検出され、縄文時代早期・前期・後期・晩期・弥生時代・平安時代の遺物が層位的に出土しており、昭和53年には国の史跡に指定されている。

縄文時代早期の竪穴建物跡の最初の発見は、1986年に行われた能代市寒川Ⅰ遺跡の調査による。以後、県北部を主体として少しずつ事例は増加したが、集成や研究は現在のところ見当たらず、報告書中に記述が散見されるのみである。これは事例の全体数が少ないことに起因すると考えられる。

註１　竪穴建物跡とは、地表を掘り下げて床面を造った半地下式の建物の遺構を指す。ただし発掘調査時には、後世の撹乱によって半地下部分が失われ、柱穴や炉だけが残存している場合もある。従来はこのような遺構についても竪穴住居跡という名称が用いられてきたが、実際は発見されたすべてが住居とは限らず、工房等であった遺構も存在する。住居以外の機能が想定される遺構を竪穴状遺構と呼んで区別する報告もあるが、住居か否かの判断根拠が不明確な場合もあった。そのため現在は、構造的特徴によって掘立柱建物跡と区別し、竪穴建物跡と呼ぶことが推奨されている（文化庁文化財部記念物課2010）。

註２　横手市岩瀬遺跡は横手川右岸に形成された河岸段丘上に立地し、浸食と堆積を繰り返す９つの河道が確認され、それらの不整合面を境界として、縄文時代草創期・早期・前期・中期の遺構・遺物が層位的に検出された。竪穴状遺構とされたＳＸＨ66は最下層の礫層上面において確認されている。北東側は調査区外へ延びており、推定2.2×２ｍの楕円形の範囲で30㎝前後の大きな礫が取り除かれ緩く窪んでいる。北東側には直径約１ｍの範囲で礫の被熱箇所が認められ、これも調査区外へ延びている。遺物は遺構とその周辺部から石器1,004点が出土し、尖頭器・両面調整石器・剥片及びそれらの接合資料で構成され、さらに多量の砕片も出土したことから、ここで石器製作が行われたものと推定されている（第２図）。

Ⅱ　事　例

事例については、はじめに県教育委員会調査分、次に市町村教育委員会調査分を、それぞれ北から南の順に概略を記述する（第２図～第７図）。なお、各事例を再検討したため、土器型式の比定や主柱穴配置の認定等については報告書と異なる場合がある。規模等の詳細は第１表に掲載した。

大館市野崎（のざき）遺跡（第２図ＳＩ143）

米代川の支流下内川左岸に形成された河岸段丘上にあり、南に延びる舌状部分の先端に立地する。2006年に発掘調査が行われ、縄文時代早期・前期・中期・後期、平安時代、中世の遺構・遺物が見つかり、縄文時代、平安時代、中世の集落跡であることがわかっている。縄文時代早期の遺構は竪穴建物跡１棟の他、同時期の可能性がある石器製作跡１か所が検出され、遺構外からは白浜式・物見台式土器が出土している。

ＳＩ143は、台地縁辺部から離れた平坦面に立地している。平面形は方形で、北東壁際と南東壁際の掘り込みは床面より一段高くなっている。これは建物の構造的特徴、もしくは建て替えによって床面の形が変更されたためと考えられる。床面は平坦で４基の柱穴が方形に配列されており、主柱穴と推定される。遺物は、トランシェ様石器と多数の剥片が出土し、石器製作との関連が指摘されている。また、柱穴Ｐ３から出土した炭化物については放射性炭素年代測定が実施され、8460±50年ＢＰの年代値が得られている。時期は、遺構内や周辺の出土遺物、年代測定の結果から、縄文時代早期中葉の可能性が高い。

大館市坂下（さかした）Ⅱ遺跡（第２図ＳＩ09・ＳＩ165、第３図ＳＩ166）

米代川の支流下内川と乱川に挟まれた河岸段丘上にあり、南西に向かって開口する小さな開析谷南東側の緩斜面に立地する。2006年に発掘調査が行われ、縄文時代早期と平安時代の集落が見つかり、縄文時代前期・後期の遺物も出土した。縄文時代早期の遺構は竪穴建物跡３棟の他、焼土遺構が検出され、遺跡外から寺の沢式・白浜式・明神裏Ⅲ式・物見台式・鳥木沢式・螢沢ＡⅡ式・吹切沢式・赤御堂式（註１）土器が出土している。

ＳＩ09は、遺跡南端の緩斜面に立地する。平面形は円形で、床面は平坦でわずかに硬化している。北側壁寄りに柱穴が１基あるが、遺構外に向かって傾いており規模も小さいことから主柱穴とは認められない。遺物は、縄文の施された繊維土器の他、剥片石器・礫が出土した。堆積土中の炭化物の放射性炭素年代測定から、4900±30年ＢＰという年代値が得られている。時期は、出土遺物から、縄文時代早期後葉の可能性がある。

ＳＩ165は、遺跡中央の平坦面に立地する。平面形は方形で、床面の中央に方形の土坑を伴う。土坑の四隅には小さな柱穴があり、土坑に付属するものと考えられる（註２）。遺物は、貝殻腹縁圧痕文・貝殻条痕文の施された吹切沢式土器の他、剥片石器と石皿が出土している。剥片石器には石鏃・石篦の未製品や破損品・石錐・スクレイパーの他、多数の剥片と砕片がある。剥片・砕片は最低でも５種類の母岩で構成され、製品の一部はこれらの母岩に含まれる可能性があり、ここで小型石器の成形や細部調整が行なわれたと想定されている。時期は、出土遺物から縄文時代早期中葉と考えられている。

ＳＩ166は、遺跡中央の平坦面に立地する。平面形は円形で、床面は平坦で硬化している。床面中央に楕円形の土坑を伴う。北西壁際に柱穴があり、主柱穴の可能性が高い。遺物は、尖底土器や貝殻腹縁圧痕文・貝殻条痕文の施された吹切沢式土器、石匙・スクレイパー等の剥片石器、磨石・石皿が出土した。時期は、出土遺物から縄文時代早期中葉と考えられている。

大館市根下戸道下（ねげどみちした）遺跡（第３図ＳＩ03、第４図ＳＩ137）

米代川右岸の河岸段丘上に立地する。1997年と2006年に発掘調査が行われ、縄文時代の陥し穴・土坑を主体に、縄文時代早期・前期・後期・晩期、弥生時代の遺構・遺物が検出されている。1997年の調査では縄文時代早期の遺構として竪穴建物跡が２棟検出された他、遺構内外から鳥木沢式・螢沢ＡⅡ式・吹切沢式・赤御堂式土器が出土している。

ＳＩ03は、小浸食谷に面した遺跡北側縁辺部に立地する。平面形は方形で、西壁際の床面は若干高く土が硬く締まっていることから、この位置に出入り口が設けられていたと指摘されている。床面中央には不整な楕円形の１号土坑、その東側に一回り小振りで方形の２号土坑があり、両者とも堆積土に地山土粒・炭化物粒・焼土粒を含むが、壁や底面に被熱の痕跡は認められていない。柱穴は36基確認されており、主柱穴と壁柱穴とがある。主柱穴の配置は六角形→五角形→四角形と柱数を減じながら変化しているものと考えられ、２回の建て替えが想定される。遺物は、尖底土器や貝殻腹縁圧痕文の施された吹切沢式併行の土器、石匙・トランシェ様石器・スクレイパー、磨製石斧、石錘・磨石が出土した。時期は、出土遺物から縄文時代早期中葉の可能性が高い。

ＳＩ137は、米代川に面した台地西側の平坦面に立地する。円形の土坑を中心として楕円形に配列された39基の柱穴と、内側にある５基の柱穴が検出された。竪穴建物の壁は後世の土地造成によって削平されているが、床面は平坦で硬く締まっている。内側にある柱穴のうち方形に並ぶＰ１～Ｐ４

の４基は主柱穴、楕円形に配列された柱穴群は壁柱穴と推定される。遺物は、土坑と柱穴から剝片が出土した。時期は報告書中で柱穴配列から縄文時代後期と推定されているが、土坑・主柱穴・壁柱穴の配置がＳＩ03と類似することから、縄文時代早期中葉の可能性がある。

北秋田市地蔵岱遺跡（第４図ＳＩ019）

米代川の支流小又川左岸の河岸段丘上に立地する。この河岸段丘は小又川との比高差15mの最低位段丘面とその南西側にある狭小な高位面から成る。1996・2004・2005年に発掘調査が行われ、縄文時代前期の小規模集落と、平安時代から中世の大規模集落を主体とすることが判明し、縄文時代早期・中期・後期・晩期の遺物も見つかっている。縄文時代早期の遺構は竪穴建物跡１棟が検出され、遺構外から沈線文や刺突文・貝殻腹縁圧痕文の施された白浜式もしくは根井沼式併行の土器が出土した。

ＳＩ019は最低位段丘面の北側縁辺部に立地する。平面形は不整な楕円形で、床面中央に地床炉がある。地床炉下には小ピットを伴っており、そこから採取した炭化物の放射性炭素年代測定から、4720±40年ＢＰの年代値が得られている。遺物は、トランシェ様石器と削器が出土した。時期は周辺の遺構外出土遺物から、縄文時代早期中葉の可能性がある。

能代市寒川Ⅰ遺跡（第４図第１号竪穴住居跡、第５図第２号～第４号竪穴住居跡、第６図第５号～第７号竪穴住居跡）

米代川河口南側の、日本海に面する海成段丘上に立地する。この段丘は小支谷によって開析されており、遺跡は小支谷に挟まれ西へ張り出した舌状部分の先端に位置する。1986年に発掘調査が行われ、縄文時代早期・中期の竪穴建物跡や土坑墓、弥生時代の土器捨場、平安時代の竪穴建物跡等が検出されている。縄文時代早期の遺構は台地中央から南西にかけての緩斜面において、竪穴建物跡７棟の他、土坑が検出され、南側斜面には土器捨場が形成されており、赤御堂式・早稲田五類・唐貝地式・長七谷地第Ⅲ群に併行する土器が出土している。

第１号竪穴住居跡は、南向きの緩斜面に立地する。他の遺構と重複しているため東側の壁の位置は不明だが、平面形は楕円形と推定され、床面中央南寄りに方形の土坑が、北西壁際に楕円形の土坑がある。柱穴６基は主柱穴と見られ、その位置が南半部の壁際に偏っていることから、北へ傾斜する片流れの屋根であった可能性がある。遺物は、平底土器や、表裏縄文もしくは内面に貝殻条痕文の施された赤御堂式併行の土器、０段多条の原体による縄文が施された早稲田五類併行の土器、土器片を加工した円盤の他、剝片石器はトランシェ様石器・石篦・掻器・尖頭器・石匙・石核・剝片、礫石器は石錘と三角柱状の磨石が出土した。時期は、出土遺物から縄文時代早期後葉の可能性が高い。

第２号竪穴住居跡は、南向きの緩斜面の中でも標高が高く、舌状台地の稜線付近に立地する。南半部の壁は検出されなかったものの、残存部分から平面形は楕円形と推定され、床面は平坦である。遺物は、表裏面とも無文で繊維を含む尖底もしくは丸底の土器、石皿・扁平打製石器等が出土した。時期は、出土遺物から縄文時代早期後葉の可能性が高い。

第３号竪穴住居跡は、南向きの緩斜面の中でも標高が高く、第２号竪穴住居跡の南東側に位置する。平面形は円形で、床は厚さ20㎝ほどの貼り床であり（断面図４層）、その上面は平坦で締まっている。床面中央には不整形の土坑があり、その上に焼土層が広がっている。遺物は、表裏縄文や内面に条痕が施された赤御堂式併行の土器が出土している。時期は、出土遺物から縄文時代早期後葉の可能性が高い。

第４号竪穴住居跡は、南向きの緩斜面、第１号竪穴住居跡の西側に位置する。平面形は楕円形で、床面中央と北側壁際に円形の土坑を伴い、南西壁に沿って６基の柱穴がある。柱穴が片側に偏る点、平面形と柱穴の配置に対し２つの土坑が同じ位置にある点において、第１号竪穴住居跡と同じ構造となっている。遺物は、０段多条・直前段合撚・反撚りの原体による縄文の施された早稲田五類併行の土器が主に中央の土坑の堆積土上位にまとまっていた他、トランシェ様石器・石篦・尖頭器・石錘・磨石が出土しており、土坑内堆積土の水洗選別により1,100点もの砕片が得られている。時期は、出土遺物から縄文時代早期後葉の可能性が高い。

第５号竪穴住居跡は、南向きの緩斜面、第１号竪穴住居跡の南東に位置する。平面形は楕円形で、床面は締まっており、中央に地床炉を伴う。２基の柱穴があるが、共に深さ10㎝内外と比較的浅く、その配置状況からも主柱穴である可能性は低い。遺物は、表裏面に無節の縄文が施された土器の他、石篦が出土している。時期は、出土遺物から縄文時代早期後葉の可能性が高い。

第６号竪穴住居跡は、南向きの緩斜面、第４号竪穴住居跡の北側に位置する。平面的には検出できず、調査区境の土層断面で北壁の立ち上がりが確認された。土層で確認した床面は約４ｍ、深さは80㎝で、床面には大きな凹凸が認められる。北壁から3.4ｍの位置には、開口部45㎝、深さ20㎝の土坑がある。遺物は堆積土中位から、綾絡文と斜縄文の施された折り返し口縁の土器や表裏縄文・羽状縄文のある赤御堂式併行の土器が出土している。時期は、出土遺物から縄文時代早期後葉の可能性が高い。

第７号竪穴住居跡は、南向きの緩斜面の中でも標高の高い所にあり、第２号竪穴住居跡の西側に位置する。平面形は楕円形で、床面は平坦であり、床面中央に地床炉を伴う。遺物は南東側の堆積土上位から、０段多条等の原体で縄文が施された早稲田五類併行の土器がまとまって出土した。時期は、出土遺物から縄文時代早期後葉の可能性が高い。

三種町鴨子台（かものこだい）遺跡（第６図ＳＩ52）

米代川河口南側の、日本海に面した海成段丘上に立地しており、遺跡範囲は南北に長い窪地となっている。1990年に発掘調査が行われ、旧石器時代の石器集中区や縄文時代早期・前期・中期の遺構・遺物、古代以降の焼土遺構が検出された。縄文時代早期の遺構は竪穴建物跡１棟が検出され、遺構外から貝殻腹縁圧痕文の施された土器が出土している。

ＳＩ52は、窪地北側縁辺の緩斜面に立地しており、他の遺構からは離れている。平面形は方形で、床面中央やや南東寄りに方形の土坑を伴う。確認面から堆積土中位にかけて焼土が分布しているが、この位置で形成された可能性は低く、人為的な埋め戻し土への混入が想定されている。また、土坑の直上に盛り上げたように堆積する６層は土坑内堆積土に類似しており、灰床炉に据えられた木枠内の層に相当する可能性が指摘されている。柱穴は床面の四隅のうち３か所に確認されており、いずれも深さ10㎝前後と浅いが、主柱穴と考えられる。遺物は出土していない。時期は、その平面形態と遺構外出土遺物から、縄文時代早期中葉と考えられている。

横手市虫内（むしない）Ⅰ遺跡（第７図ＳＩ4054）

雄物川支流の横手川左岸に形成された低位段丘上に立地する。1991～1993年に発掘調査が行われ、主に縄文時代後期から晩期の土坑墓や土器埋設遺構が多数検出され、大規模な墓域であることが判明している。縄文時代早期の遺構は竪穴建物跡１棟が検出され、主に遺構内から表裏縄文の土器が

出土している。

ＳＩ4054は、遺跡南西にある丘陵裾部の緩斜面に立地し、ＳＩ4054の南西半は断層によって分断され失われている。平面形は方形と推定される。床面東壁際寄りに３基の柱穴が検出されており、このうち最も深く、柱痕跡が確認されているＰ２は主柱穴と考えられる。なお、この柱穴から出土した柱材由来と推定される炭化物の放射性炭素年代測定から、6540±120ＢＰの年代値が得られている。遺物は、表裏縄文の赤御堂式や早稲田五類併行の土器、土器片を再利用した有孔円盤状土製品、スクレイパー等の剥片石器が出土した。時期は、出土遺物から縄文時代早期後葉と考えられている。

鹿角市物見坂Ⅲ遺跡（第７図第１号竪穴住居跡）

米代川右岸の火砕流台地上に立地する。鹿角市教育委員会によって2001・2004年に発掘調査が行われ、縄文時代の土坑墓やフラスコ状土坑、平安時代の建物跡等が検出され、縄文時代早期から晩期、続縄文時代・平安時代・中世の遺物が出土している。2004年の調査では、縄文時代早期の遺構は竪穴建物跡１棟の他、焼土遺構が検出され、寺の沢式・白浜式・物見台式併行の土器が出土している。

第１号竪穴住居跡は、台地上の平坦面に立地する。平面形は方形で、北西壁際に床面より10㎝高い部分があり、幅80㎝、奥行き40㎝で出入口と考えられる。床面中央やや南西寄りに楕円形の土坑を伴う。柱穴は８基あり、このうち方形に配置された４基が主柱穴と判断される。遺物は、貝殻腹縁圧痕文や多条沈線文、爪形文の施された寺の沢式併行の土器や剥片石器が出土した。時期は、出土遺物から縄文時代早期中葉の可能性が高い。

秋田市地蔵田Ａ遺跡（第７図１号竪穴遺構・２号竪穴遺構）

雄物川の支流岩見川右岸にある御所野台地の南西端部に立地する。秋田市教育委員会により、1992・1993年にかけて遺跡を東からＡ～Ｃの３地区に分けて発掘調査が行われ、旧石器時代の石器ブロック、縄文時代・弥生時代・平安時代の建物跡や、人骨が出土した中近世の土坑が検出された。1993年に行われたＣ地区の調査では、縄文時代早期の竪穴建物跡２棟が検出された他、それらの遺構から平底土器や表裏縄文の土器等が出土している。

１号竪穴遺構は、遺跡北西側の台地縁辺部付近の平坦面に立地している。平面形は楕円形で、東壁際に楕円形の土坑を伴う。北壁付近に柱穴が１基あるが、主柱穴の可能性は低い。遺物は、底面に縄文の施された平底土器や表裏縄文土器、０段多条の単節縄文や綾杉状縄文等が施された早稲田五類併行の土器の他石錘が出土した。時期は出土遺物から縄文時代早期後葉の可能性が高い。

２号竪穴遺構は遺跡北西側の台地縁辺部付近の平坦面、１号竪穴遺構の東側に位置する。平面形は楕円形で、西壁際に楕円形の土坑を伴う。遺物は、単節縄文の施された土器が出土した。時期は、規模や平面形が１号竪穴遺構と類似することから、縄文時代早期後葉の可能性が高い。

註１　坂下Ⅱ遺跡報告書の遺構外出土遺物においては前期の土器として扱われているが、表裏縄文の特徴から赤御堂式と判断した。

註２　坂下Ⅱ遺跡報告書中では建物の主柱穴と推定しているが、柱穴規模が小さいことや柱穴間隔が狭いことから、土坑に伴うものと考える。

Ⅲ　総　括

本項では、縄文時代早期竪穴建物跡（９遺跡19棟）について、時期・竪穴形態・柱穴配置・付属施設等の諸属性を整理する。事例数は限られているが、現段階で抽出された特徴を比較することにより、秋田県域における縄文時代早期竪穴建物跡の特質とその変遷を考察する。

時期

秋田県内において早期前葉に属する竪穴建物跡は未検出である[註1]。竪穴建物跡の確実な例は早期中葉以降に認めることができ、寺の沢式土器を伴う物見坂Ⅲ遺跡第１号竪穴住居跡が現段階での県内最古例と考えられる。ここでは各竪穴建物跡の帰属時期を、貝殻・沈線文系土器を伴う中葉段階、縄文条痕文系土器を伴う後葉段階の大きく２段階に分けて、次のように位置付けておく[註2]。

中葉段階：６遺跡８棟（野143、坂165・166、根03・137、地019、鴨52、物１[註3]）

後葉段階：４遺跡11棟（坂09、寒１～７、虫4054、地１・２[註4]）

なお、４遺跡６棟（野143、坂09・165・166、根03、虫4054）については放射性炭素年代測定から、中葉例ではおよそ8900～7800年ＢＰ、後葉例では6500～5600年ＢＰの年代値が得られている。

遺跡分布・立地

早期の竪穴建物跡が検出された遺跡は県北部、特に米代川水系の上流域に集中する。このような分布傾向は、東北地方北部において早期の遺跡が比較的濃密に分布する青森県の太平洋側沿岸部との距離的な関係を反映しているのかもしれない。遺跡の立地は河岸段丘・海成段丘等の台地上にあり、低地では確認されていない。竪穴建物跡は台地上でも比較的平坦な場所を占地しており、傾斜地での検出例は認められない。

竪穴建物跡検出数

１遺跡あたりの竪穴建物の検出数を時期毎に比較すると、中葉段階では１棟４例、２棟２例、後葉段階では１棟２例、２棟１例、７棟１例となる。このように県内の縄文時代早期集落における竪穴建物跡の構成は、２棟以下の少数棟を基本としている。その中で寒川Ⅰ遺跡の７棟という検出数は突出している。早期後葉段階での竪穴建物数の増加は、秋田県域において住居構造としての竪穴建物が一般化したことを示すものと考えられ、前期以降の本格的な定住生活の萌芽を示す現象の一つとして注目される。

竪穴形態・規模

竪穴の平面形態は次の３種に分けられる。方形：６棟（野143、坂165、根03、鴨52、虫4054、物１）。円形：３棟（坂09・166、寒３）。楕円形：９棟（根137、地019、寒１・２・４・５・７、地１・２）。方形例は中葉段階に、円形・楕円形平面例は後葉段階に偏在する傾向が認められる[註5]。

竪穴の床面積は、中葉段階で最大34.2㎡（根03）、最小3.1㎡（鴨52）、平均15.2㎡、後葉段階で最大26.6㎡（寒１）、最小3.8㎡（寒２）、平均9.5㎡である。中葉段階では概ね10㎡以上の広さをもつ一方、後葉段階では10㎡に満たない小型の例が大勢を占めており、竪穴規模には小型化の傾向が看取される。ただし、寒川Ⅰ遺跡例に限られるが20㎡を超える大型の例も認められることから、後葉段階では集落内における建物規模の大小分化が発生していた可能性も考慮しておく必要がある。

竪穴の壁高は、中葉段階では最高54㎝（地019）、最低７㎝（坂165）、平均29.6㎝、後葉段階では最高80㎝（寒６）、最低15㎝（虫4054）、平均33.3㎝である。壁高は遺構の確認レベルや残存

状況など外的要因に左右されるため単純な比較はできないが、概ね20㎝前後と比較的浅い傾向にある。その中で、寒川Ⅰ遺跡例のように50㎝を大きく超える例は特筆できる。上屋構造との兼ね合いから、室内空間を確保するために深く掘り込む場合もあったのであろう。

柱穴配置・柱穴規模

柱穴配置は主柱穴及び壁柱穴の有無により、Ⅰ類：主柱を伴わないもの、Ⅱ類：主柱を伴うもの、Ⅲ類：壁柱と主柱を伴うものに大別し、主柱の配置状況と組み合わせて次のように細分した。Ⅰａ類：柱穴を全く伴わないもの（寒２・３・７、地２）、Ⅰｂ類：主柱・壁柱以外の柱穴を少数伴うもの（坂09・165、地019、寒５、地１）、Ⅱａ類：壁寄りに主柱１本を伴うもの[註６]（坂166、虫4054）、Ⅱｂ類：壁に接して主柱３本が配置されるもの（鴨52）、Ⅱｃ類：主柱４本が竪穴の中心に方形配置されるもの（物１、野143）、Ⅱｄ類：主柱４本が竪穴の一方に偏って方形配置されるもの（寒１）、Ⅱｅ類：主柱６本が竪穴の一方に偏って壁寄りに弧状配置されるもの（寒４）、Ⅲａ類：壁柱を伴い主柱４本が方形配置されるもの（根03・137）、Ⅲｂ類：壁柱を伴い主柱５本が五角形配置されるもの（根03）、Ⅲｃ類：壁柱を伴い主柱６本が方形配置されるもの（根03）。量的な面から単純に比較すると、Ⅰ類は後葉段階に多いこと、Ⅱ類は中葉段階に多いこと、Ⅲ類は中葉段階に限られること、等を時期的傾向として抽出できる。また、主柱の有無と竪穴規模との相関性は強く、床面積が10㎡を超える８例中６例は主柱を伴うⅡ・Ⅲ類で、10㎡以下の10例中８例は主柱を伴わないⅠ類である。

柱穴規模を平均値から時期別に比較すると、主柱の長径は中葉段階で24㎝、後葉段階で29㎝、主柱の深さは中葉段階で21㎝、後葉段階で11㎝である。平面規模では後葉段階の方がやや大きいが、深さは中葉段階の方が倍以上あり、より深く固定されていた可能性が高い。壁柱は中葉段階の２例（根03・137）のみで、長径16㎝、深さ14㎝となっており、規模は主柱と同程度か、それより小さく浅い。図上で判断する限り内傾する壁柱はごく僅かであることから、直接垂木尻を受けていたと言うより、垂直に立ち上がる側壁を構成していたと見るべきであろう。

上屋構造

今回収集した事例中に、上屋構造や屋根葺材の復原に有効な焼失例等は含まれていないが、上述した竪穴形状と柱穴配置を踏まえ、上屋構造の推定を試みたい。[註７]Ⅰ類に対応する竪穴は面積が３～５㎡代の小型を主体とし、最大でも11.2㎡と総じて小規模であり、平面形は方形・円形・楕円形の各種が認められる。伏屋式を基本とし、楕円形例には竪穴外部に２組の合掌組を据えて棟木を上げ垂木を葺き下ろした寄棟造り、方形・円形例には垂木を頂点で結束して竪穴外周まで円錐形に葺き下ろしたテント式の屋根形式が想定される。Ⅱ類に対応する竪穴は３㎡代の小型から、20㎡を超える大型を含み、平面形は方形・楕円形・円形の各種が認められる。全て伏屋式を基本とし、Ⅱａ類は棟木を上げ、Ⅱｂ～ｅ類は主柱に梁桁を架けて竪穴外に垂木を葺き下ろした寄棟造りの屋根形式が想定される。このうちⅡｄ・ｅ類に対応する竪穴平面は共に大型の楕円形を呈し、主柱配置が片寄っているため様々な架構方法が考えられるが、竪穴長軸方向に勾配をもつ特殊な屋根形状をなしていた可能性もあろう。Ⅲ類に対応する竪穴は19㎡以上と比較的大型で、平面形は方形・楕円形が認められる。壁柱は垂直に立ち上げて側壁を設け、主柱に梁桁を架け、側壁上へ垂木を葺き下ろした壁立式寄棟造りの屋根形式が想定される。構造形式を通じて見た場合、壁立式が想定されるのは根下戸道下遺跡の２

例（中葉段階）に限られることから、中葉段階では伏屋式と壁立式が併存し、後葉段階になると壁立式が低調となった可能性も考えられる。

炉・付属施設

炉及び土坑など付属施設の設置状況を見てみると、地床炉を伴うもの：３棟（地019、寒５・７）、土坑を伴うもの：12棟（坂165・166、根03・137、寒１・３・４・６、鴨52、物１、地１・２）、全く伴わないもの：３棟（野143、坂09、寒２）となる。土坑については、全体として壁・底面に燃焼の形跡が認められないことから、掘込炉である可能性は低く、灰床炉の可能性が考えられる。(註８) 調査所見から土坑全てを灰床炉と断定することはできないが、土坑より上位の堆積状況に木枠の存在が想定できる例（寒３、鴨52）や、土坑の四隅に木枠固定用の杭穴と見られる小ピットを伴う例（坂165）も認められることから、その蓋然性は高いと考えられる。炉については、中葉段階では灰床炉を主体とし、後葉段階には地床炉と、灰床炉とが併存したものと推測する。

なお、坂下Ⅱ遺跡と物見坂Ⅲ遺跡では、同じ調査区内に竪穴建物の他に屋外炉と見られる焼土遺構が検出されている。竪穴建物跡の中には炉及び土坑等の付属施設を全く伴わない例が存在することから、このような屋外炉使用の観点も無視できない。(註９)

建て替え

主柱の配置状況から建て替えが認められる例は２つあり（根03、寒１）、根下戸道下遺跡例では２回、寒川Ⅰ遺跡例では１回の建て替えが想定される。建て替えの実態について、長期継続的であるのか断続的であるのかは判断根拠に乏しく、ここでは検証の対象としない。しかし何れにせよ建て替えが行われたという事実そのものは、家屋設置場所の反復利用を示す意味において重要である。(註10)

註１　日計式押型文系土器が出土した遺跡は、鹿角市物見坂Ⅲ遺跡、大館市釈迦内中台Ⅰ遺跡、湯沢市岩井堂洞窟など僅かではあるが確認されており、当該時期の竪穴建物が今後新たに検出される可能性も十分に残されている。

註２　当該時期の竪穴建物跡出土土器は破片資料に限られ、土器が全く伴わない場合もあり、土器型式に準拠した時期決定の困難な例が大勢を占めている。このため、今回は大枠で捉えた時期設定に留めている。なお、土器編年については熊谷常正氏、新海和広氏、領塚正浩氏の論考を参考とした(熊谷2008、新海2006、領塚1996)。

註３　本項では便宜的に遺跡頭文字と遺構番号を組み合わせて遺構名を表示した。例えば、「地１」は地蔵田Ａ遺跡１号竪穴遺構、「寒１」は寒川Ⅰ遺跡第１号竪穴住居跡、「地019」は地蔵岱遺跡ＳⅠ019を指す。

註４　本文中で竪穴建物跡の時期が容易に区別できるよう、後葉例にのみ下線を引いている。

註５　平面形状のこのような変化傾向は、鴨子台遺跡発掘調査報告書中で既に指摘されている(秋田県教育委員会1992)。

註６　該当する２例とも切り合い等により壁の一部が失われているが、竪穴中軸線上の対向する壁寄りの位置に２本の主柱を有し、棟持柱が設置されていたと推測する。

註７　上屋構造の推定は、宮本長二郎氏の研究成果を参考とした(宮本1996)。

註８　今村啓爾氏は、北海道・東北・関東地方各地で検出された縄文時代早期竪穴住居跡の床面にある方形基調の掘り込みについて、灰を入れて使用した灰床炉を想定している(今村1985)。灰は特殊な堆積環境にない限り分解消失して残らないと説明し、さらに掘り込みより上には木枠が設置されていたとして、それを示す堆積例を紹介した他、掘り込みに伴うピットを木枠固定用の杭穴と推定している。

註９　坂下Ⅱ遺跡発掘調査報告書では、物見坂Ⅲ遺跡例を参照としながら、焼土遺構について竪穴建物に伴う屋外炉の可能性を想定している(秋田県教育委員会2009)。

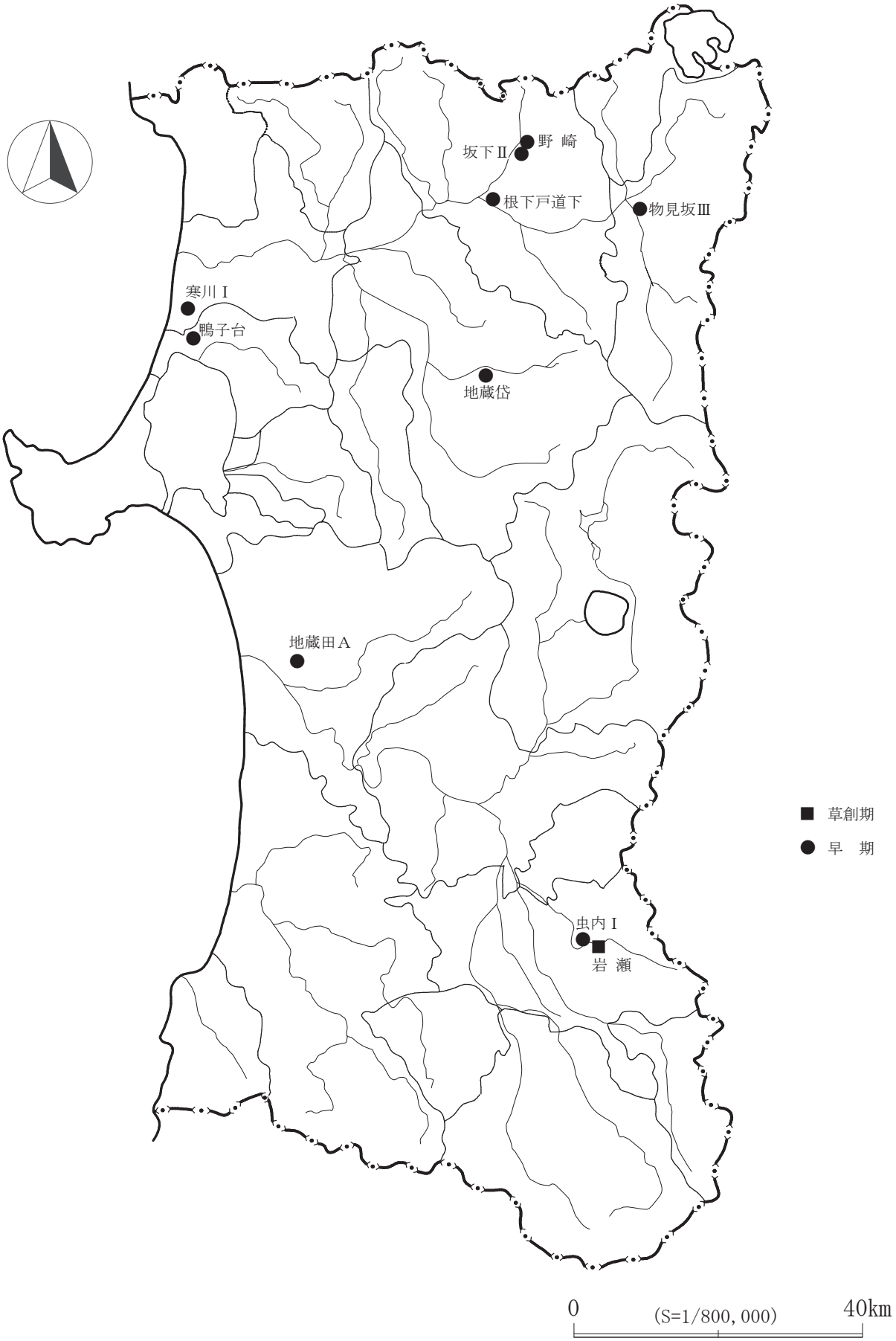
註10　縄文時代早期における定住性の評価については、未だ不明な部分が多い。神野恵氏は、東日本の草創期・早期の竪穴建物を概観する中でこの問題に触れ、草創期以前の遊動生活から早期の「回帰的定住生活」を経て前期以降の定住生活を迎えるといった生活様式モデルの変遷を予察している(神野2001)。

参考文献

秋田県教育委員会　1969年『岩井堂岩陰遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第16集
秋田県教育委員会　1970年『岩井堂岩陰遺跡第４洞穴発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第21集
今村啓爾　1985年「縄文早期の竪穴住居址にみられる方形の掘り込みについて」『古代』第80号　早稲田大学考古学会
熊谷常正　2008年「縄文条痕文系土器(東北地方)」小林達雄編『総覧　縄文土器』　株式会社アム・プロモーション
新海和広　2006年「秋田県における早期中葉貝殻沈線文系土器群の様相」『第４回　縄文時代早期中葉土器群の再検討－資料集－』　海峡土器編年研究会
神野恵　2001年「第４章　縄文草創期・早期の竪穴住居－北海道・東北・関東地方－」浅川滋男編『竪穴住居の空間分節に関する復原研究』
戸沢充則　1994年『縄文時代研究事典』　株式会社東京堂出版
中村哲也・坂本真弓　1998年「青森県の縄文早期住居跡集成」『研究紀要』第３号　青森県埋蔵文化財センター
文化庁文化財部記念物課　2010年「第Ⅴ章第３節　竪穴建物」『発掘調査の手引き－集落遺跡発掘編－』
宮本長二郎　1996年「竪穴住居の復元」『考古学による日本歴史15　家族と住まい』　雄山閣出版株式会社
宮本長二郎　1996年『日本原始古代の住居建築』　中央公論美術出版
領塚正浩　1996年「東北地方北部に於ける縄文時代早期前半の土器編年(上)」『史館』第27号　史館同人
領塚正浩　1996年「東北地方北部に於ける縄文時代早期前半の土器編年(下)」『史館』第28号　史館同人

資料出典

1　秋田県教育委員会　1988年『一般国道７号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―寒川Ⅰ遺跡・寒川Ⅱ遺跡―』秋田県文化財調査報告書第167集
2　秋田県教育委員会　1992年『一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ―鴨子台遺跡・八幡台遺跡―』秋田県文化財調査報告書第230集
3　秋田県教育委員会　1996年『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ＸＸⅡ―岩瀬遺跡―』秋田県文化財調査報告書第263集
4　秋田県教育委員会　1998年『虫内Ⅰ遺跡―東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ＸＸⅢ―』秋田県文化財調査報告書第274集
5　秋田県教育委員会　2000年『根下戸道下遺跡―大館西道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ―』秋田県文化財調査報告書第297集
6　秋田県教育委員会　2008年『野崎遺跡―日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＸⅥ―』秋田県文化財調査報告書第429集
7　秋田県教育委員会　2008年『地蔵岱遺跡―森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅨ―』秋田県文化財調査報告書第434集
8　秋田県教育委員会　2009年『坂下Ⅱ遺跡―日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＸⅧ―』秋田県文化財調査報告書第444集
9　秋田市教育委員会　1994年『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書―地蔵田Ａ遺跡―』
10　鹿角市教育委員会　2005年『秋田県鹿角市物見坂Ⅲ遺跡・物見坂Ⅱ遺跡(1)―中山間地域総合整備事業関連発掘調査報告書―』鹿角市文化財調査資料79

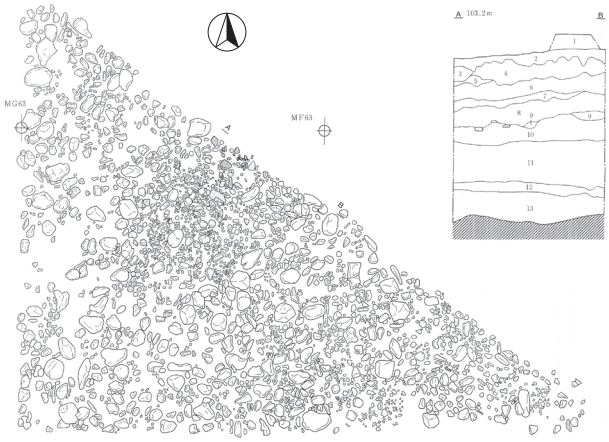

野 崎
坂下Ⅱ
根下戸道下
物見坂Ⅲ
寒川Ⅰ
鴨子台
地蔵岱
地蔵田Ａ
虫内Ⅰ
岩 瀬
草創期
早 期
0
(S=1/800,000)
40km

第１図　遺跡分布図

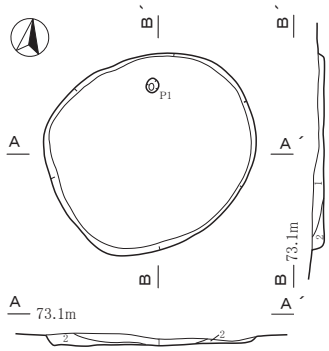
第１表　秋田県内の縄文時代早期竪穴建物跡一覧

文献	遺跡名	遺構名	所在市町村	挿図番号	時期	竪穴					柱穴								炉・付属施設				建替回数	備考
						平面形	長径(m)	短径(m)	壁高(cm)	床面積(㎡)	柱穴配置分類	柱穴数			柱穴規模平均値(cm)				炉・付属施設	規模(cm)				
												主柱	壁柱	その他	主柱長径	主柱深さ	壁柱長径	壁柱深さ		長径	短径	深さ		
6	野崎遺跡	SI 143	大館市	第2図	中葉?	方形	3.6	3.3	53	10.9	Ⅱc	4	0	0	26	25	－	－	無	－	－	－	0	
8	坂下Ⅱ遺跡	SI 09	大館市	第2図	後葉	円形	2.7	2.5	16	5.2	Ⅰb	0	0	1	－	－	－	－	無	－	－	－	0	
8	坂下Ⅱ遺跡	SI 165	大館市	第2図	中葉	方形	3.9	3.8	7	(11.2)	Ⅰb	0	0	4	－	－	－	－	土坑	161	131	7	0	南東壁の一部は平安時代の竪穴建物跡に切られ消失。
8	坂下Ⅱ遺跡	SI 166	大館市	第3図	中葉	円形	5.6	5.4	12	(21.3)	Ⅱa	(1)	0	0	38	14	－	－	土坑	198	154	20	0	南東壁は平安時代の竪穴竪建物跡及び土坑に切られ消失。
5	根下戸道下遺跡	SI 03	大館市	第3図	中葉	方形	7.5	6.5	21	34.2	Ⅲa Ⅲb Ⅲc	15	17	4	24	(－)	18	(－)	土坑 土坑	173 85	135 56	13 8	2	北東側で土坑１基を切る。
5	根下戸道下遺跡	SI 137	大館市	第4図	中葉?	楕円形?	(5.7)	(5.2)	—	(19.9)	Ⅲa	4	39	1	14	15	15	14	土坑	66	60	23	0	竪穴部は削平のため消失。
7	地蔵岱遺跡	SI 019	北秋田市	第4図	中葉?	楕円形	4.6	3	54	3.4	Ⅰb	0	0	1	－	－	－	－	地床炉	100	90	－	0	上部を縄文時代の竪穴建物跡２棟及び焼土遺構１基に切られる。
1	寒川Ⅰ遺跡	第1号竪穴住居跡	能代市	第4図	後葉	楕円形	6.8	(4.5)	40	(26.6)	Ⅱd Ⅱd?	6	0	1	28	10	－	－	土坑 土坑	120 95	100 70	25 15	1	北側は土坑に切られる。東壁は検出できず。
1	寒川Ⅰ遺跡	第2号竪穴住居跡	能代市	第5図	後葉	楕円形?	—	—	20	－	Ⅰa	0	0	0	－	－	－	－	無	－	－	－	0	北東壁は土坑に切られ、南西壁は検出できず。
1	寒川Ⅰ遺跡	第3号竪穴住居跡	能代市	第5図	後葉	円形	2.5	2.5	75	3.8	Ⅰa	0	0	0	－	－	－	－	土坑	80	50	22	0	
1	寒川Ⅰ遺跡	第4号竪穴住居跡	能代市	第5図	後葉	楕円形	6.0	3.9	25	20.4	Ⅱe	6	0	0	29	12	－	－	土坑 土坑	140 80	130 70	45 15	0	一部平安時代以降の溝跡に切られる。
1	寒川Ⅰ遺跡	第5号竪穴住居跡	能代市	第6図	後葉	楕円形	3.5	2.2	20	5.6	Ⅰb	0	0	2	－	－	－	－	地床炉	94	55	－	0	一部平安時代の竪穴建物跡と、平安時代以降の溝跡に切られる。
1	寒川Ⅰ遺跡	第6号竪穴住居跡	能代市	第6図	後葉	不明	—	—	80	—	不明	—	—	—	－	－	－	－	土坑	－	－	20	0	断面のみの検出し、北東側調査区外へ延長する。
1	寒川Ⅰ遺跡	第7号竪穴住居跡	能代市	第6図	後葉	楕円形	3.7	2.4	25	10	Ⅰa	0	0	0	－	－	－	－	地床炉	127	121	－	0	南壁は一部撹乱を受け消失。
2	鴨子台遺跡	SI 52	山本郡三種町	第6図	中葉?	方形	2.3	2	36	3.1	Ⅱb	3	0	0	27	8	－	－	土坑	60	50	12	0	
4	虫内Ⅰ遺跡	SI 4054	横手市	第7図	後葉	方形	(2.0)	(2.0)	15	(4.0)	Ⅱa	(1)	0	2	36	20	－	－	無?	－	－	－	0	南西側は断層に切られ消失。
10	物見坂Ⅲ遺跡	第1号竪穴住居跡	鹿角市	第7図	中葉	方形	4.7	4.1	24	13.6	Ⅱc	4	0	4	24	34	－	－	土坑	50	40	2	0	鹿角市教育委員会調査。
9	地蔵田A遺跡C地区	1号竪穴遺構	秋田市	第7図	後葉	楕円形	3.3	2.4	30	4.2	Ⅰb	0	0	1	－	－	－	－	土坑	110	90	37	0	秋田市教育委員会調査。
9	地蔵田A遺跡C地区	2号竪穴遺構	秋田市	第7図	後葉	楕円形	3.8	2	20	5.5	Ⅰa	0	0	0	－	－	－	－	土坑	100	90	9	0	秋田市教育委員会調査。
3	岩瀬遺跡	SXH 66	横手市	第2図	草創期	不明	(2.2)	(2.0)	—	—	—	0	0	0	－	－	－	－	地床炉	(100)	(80)	－	0	北東側は調査区外へ延長する。

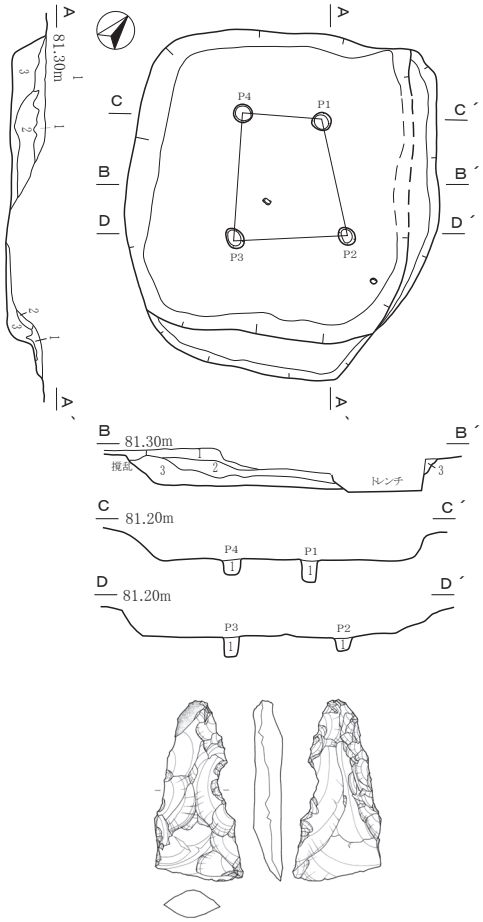
※括弧内の数値は推定値を示す。(－)は報告書中に記載がないため数値の不明なものを示す。



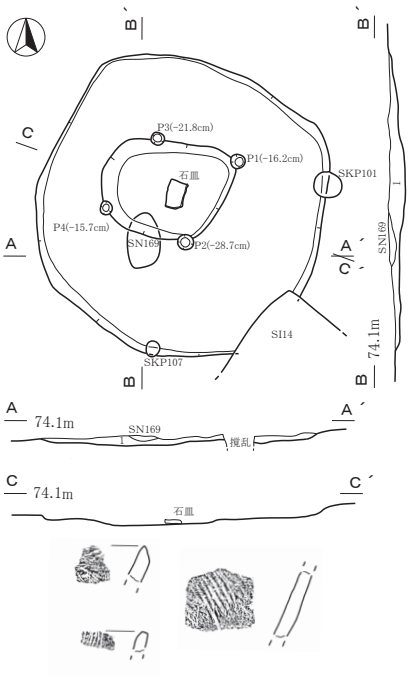
横手市 岩瀬遺跡 ＳＸＨ66



大館市 坂下Ⅱ遺跡 ＳＩ09



大館市 野崎遺跡 ＳＩ143

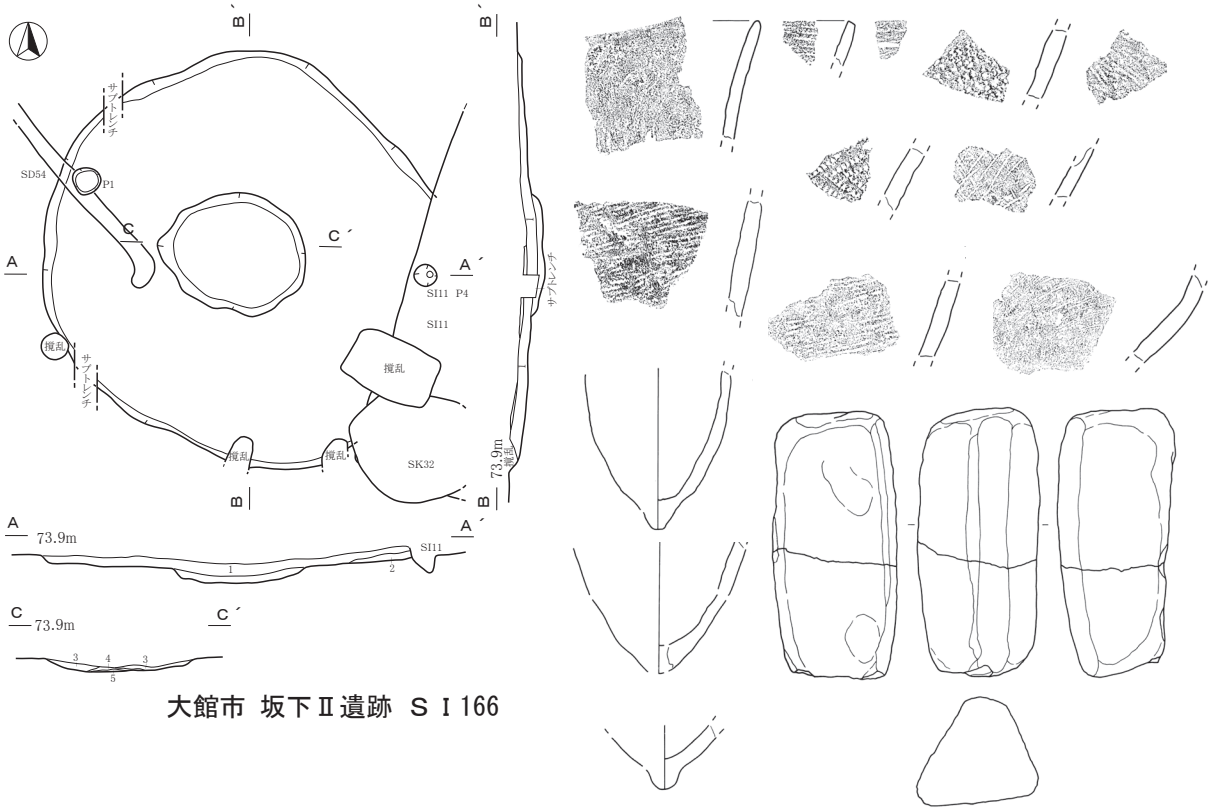


大館市 坂下Ⅱ遺跡 ＳＩ165

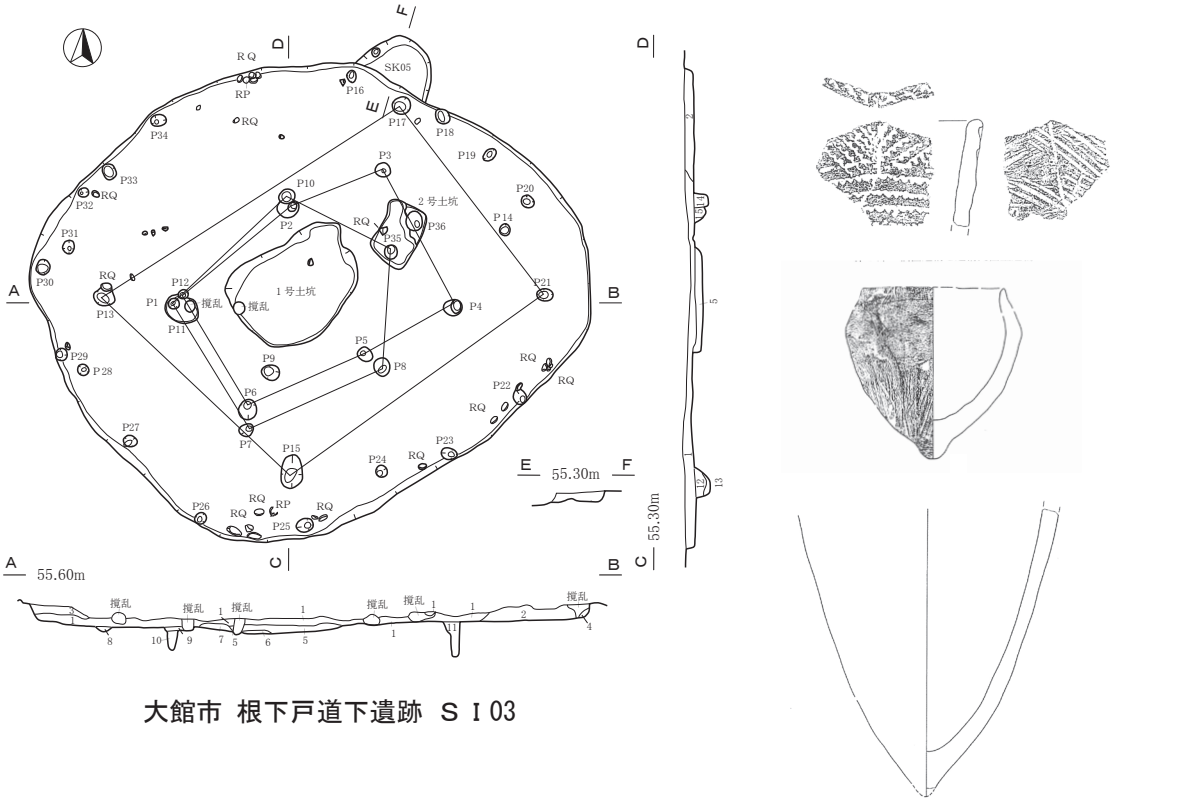
遺構 0 S=1/100 2m

遺物 0 S=1/4 10cm

第２図　縄文時代早期の竪穴建物跡と遺構内出土遺物（１）



大館市 坂下Ⅱ遺跡 ＳＩ166

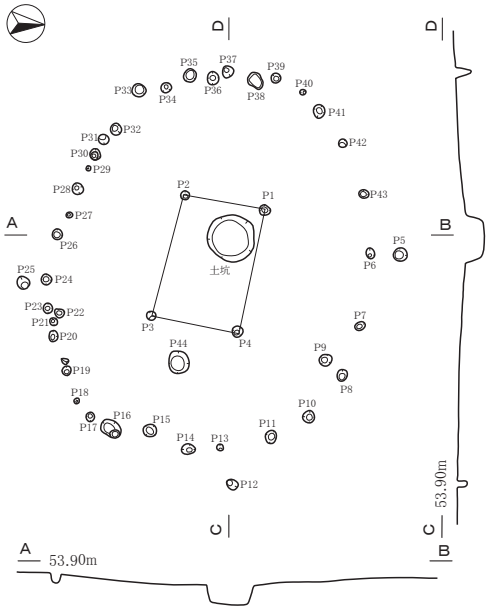


大館市 根下戸道下遺跡 ＳＩ03

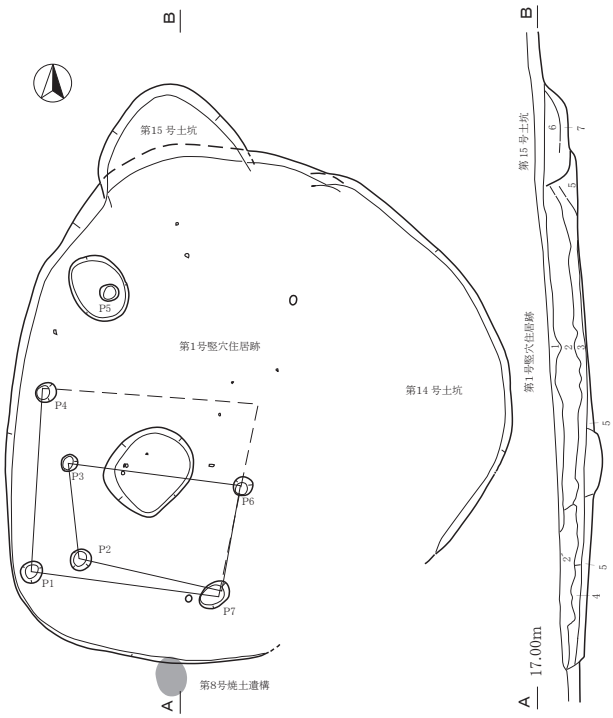
遺構 0 S=1/100 2m

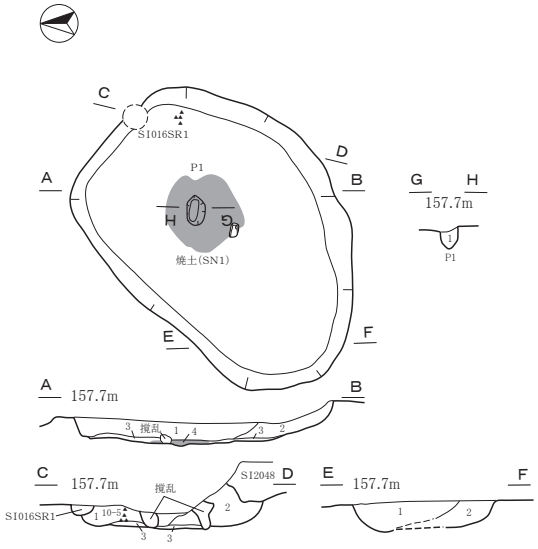
遺物 0 S=1/4 10cm

第３図　縄文時代早期の竪穴建物跡と遺構内出土遺物（２）

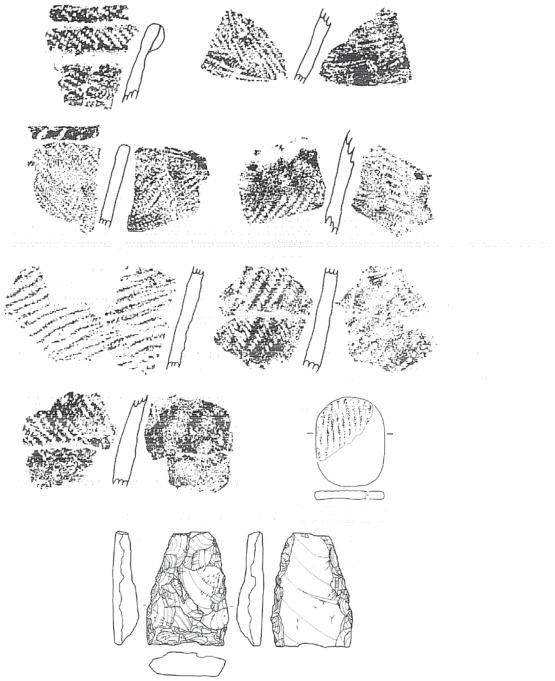


大館市 根下戸道下遺跡 ＳⅠ137





北秋田市 地蔵岱遺跡 ＳⅠ019

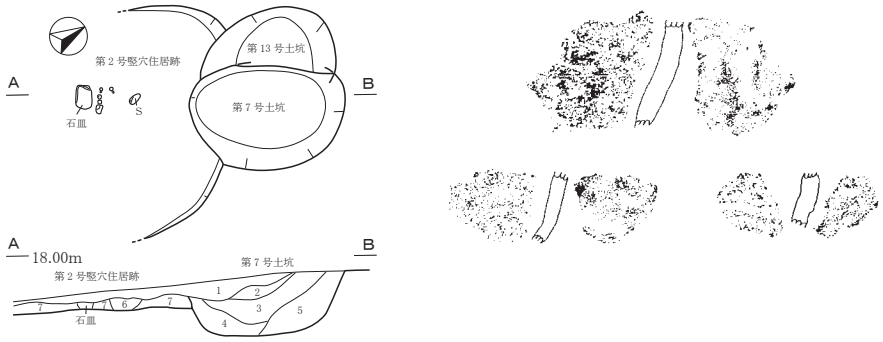


能代市 寒川Ⅰ遺跡 第１号竪穴住居跡

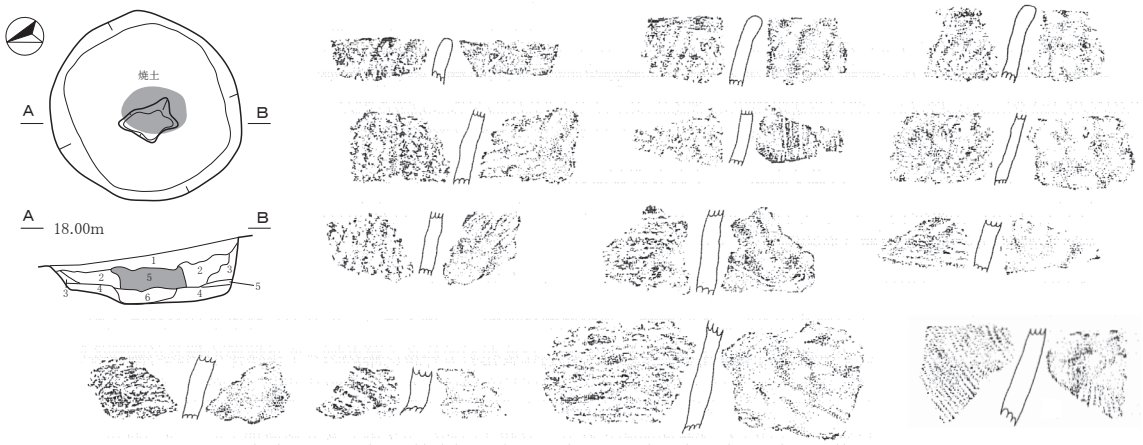
遺構 0 S=1/100 2m

遺物 0 S=1/4 10cm

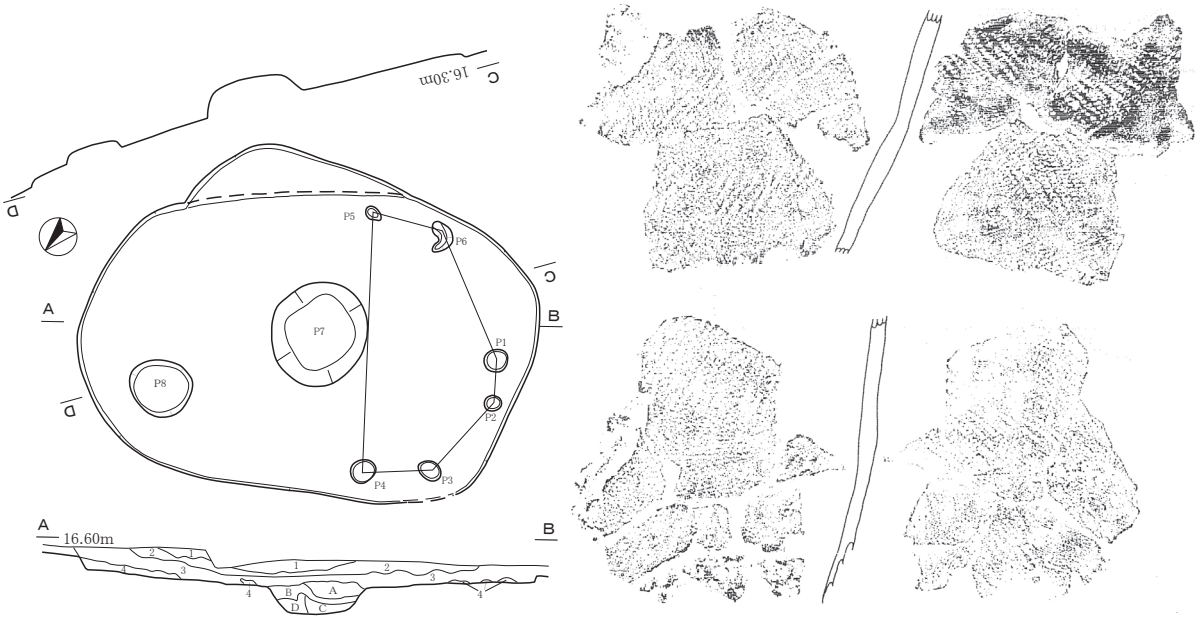
第４図　縄文時代早期の竪穴建物跡と遺構内出土遺物（３）



能代市 寒川Ⅰ遺跡 第２号竪穴住居跡



能代市 寒川Ⅰ遺跡 第３号竪穴住居跡



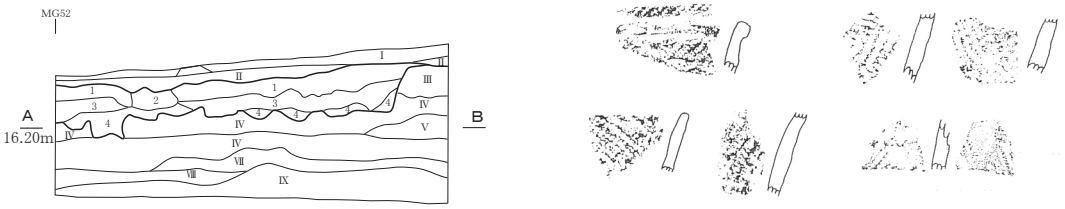
能代市 寒川Ⅰ遺跡 第４号竪穴住居跡

遺構 0 S=1/100 2m

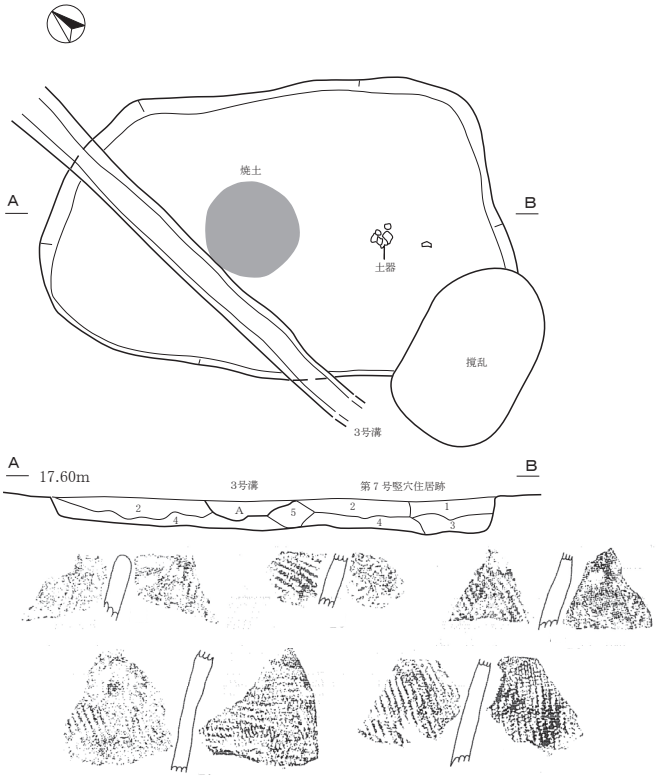
遺物 0 S=1/4 10cm

第５図　縄文時代早期の竪穴建物跡と遺構内出土遺物（４）

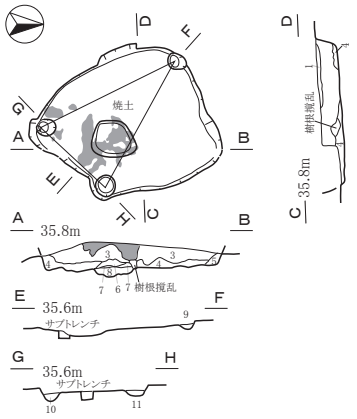
能代市 寒川Ⅰ遺跡 第５号竪穴住居跡



能代市 寒川Ⅰ遺跡 第６号竪穴住居跡



能代市 寒川Ⅰ遺跡 第７号竪穴住居跡

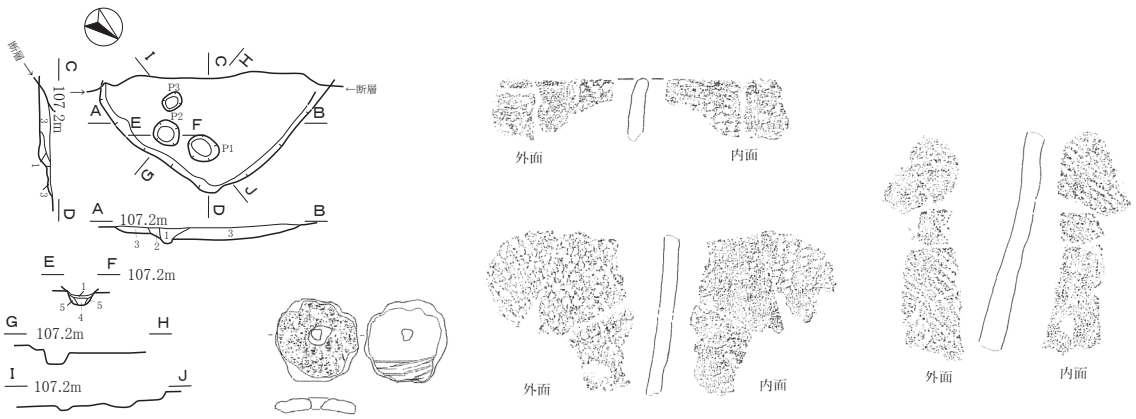


三種町 鴨子台遺跡 ＳＩ52

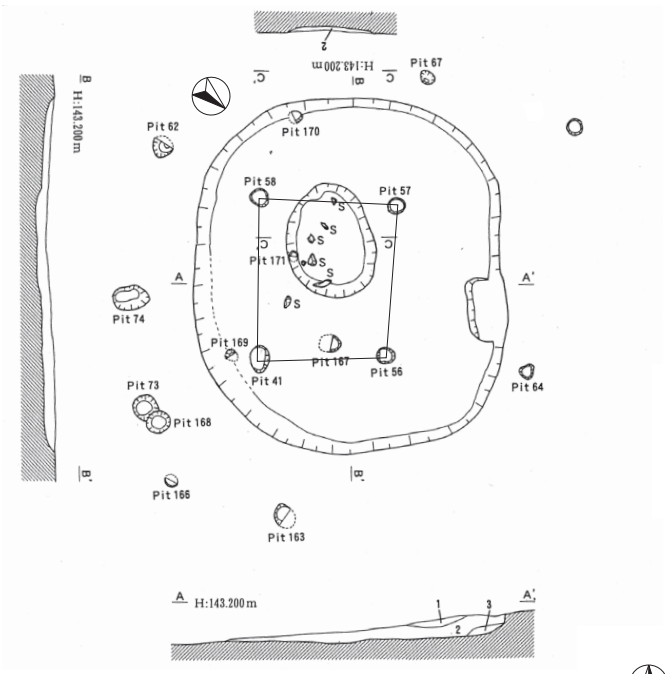
遺構 0 S=1/100 2m

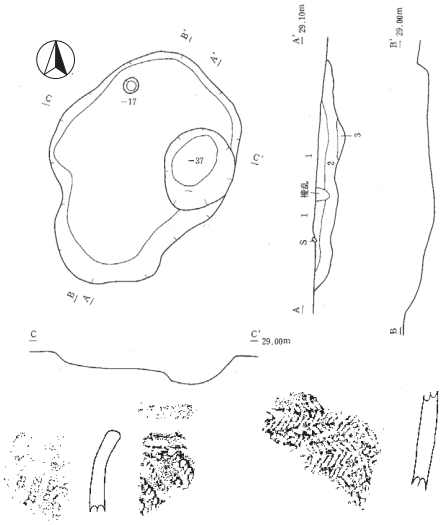
遺物 0 S=1/4 10cm

第６図　縄文時代早期の竪穴建物跡と遺構内出土遺物（５）

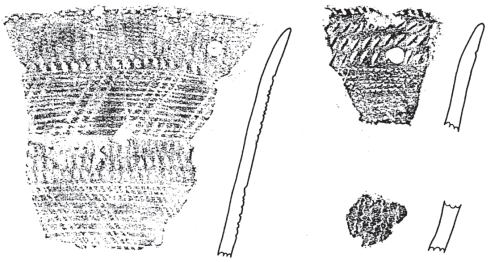


横手市 虫内Ⅰ遺跡 ＳＩ4054

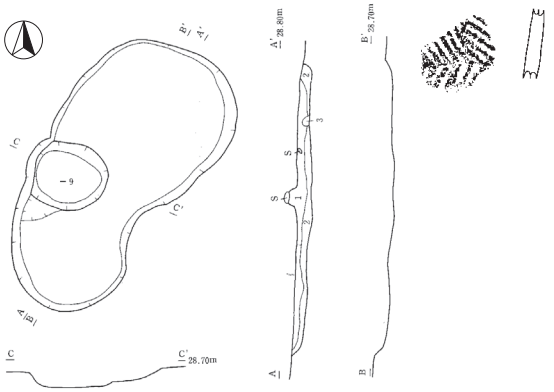




秋田市 地蔵田Ａ遺跡 １号竪穴遺構
（秋田市教育委員会調査）



鹿角市 物見坂Ⅲ遺跡 第１号竪穴住居跡
（鹿角市教育委員会調査）



秋田市 地蔵田Ａ遺跡 ２号竪穴遺構
（秋田市教育委員会調査）

遺構 0 S=1/100 2m

遺物 0 S=1/4 10cm

第７図　縄文時代早期の竪穴建物跡と遺構内出土遺物（６）

秋田県埋蔵文化財基準資料３
縄文時代竪穴建物跡集成Ⅰ（早期）

発 行 年 月　　平成26年３月

編集・発行　　秋田県埋蔵文化財センター
〒014-0802
秋田県大仙市払田字牛嶋20番地
電　話　0187-69-3331
ＦＡＸ　0187-69-3330
ＵＲＬ　http://www.pref.akita.jp/gakusyu/maibun_hp/index2.htm
E-mail　maibun@pref.akita.lg.jp